

縁あって野田中学校に勤務するようになり、本日で2か月となる。勤務先が変わり、新たに始めたことがある。今まではやっていなかったことである。いや、やろうとしていながらもできずにいたことである。それは、人前で話すときに、原稿を一切見ないことである。

今までも、短いあいさつ程度の話や校長先生のお話であれば、原稿なしで話したことはある。私がやろうとしたのは、入学式の校長式辞を原稿なしで行うというものである。私の中の“リトルまさお”が「何もそこまでしなくてもいいんじゃないの。誰かに頼まれたわけでもないでしょ」とささやく。

一方、もう一人のリトルまさおが「いや、ずっと前からやろうとしていたのだから、やらなくてはいけない。誰のためでもない。自分のためにやるんだ。ここでやらなければ後悔する。学校がかわったこと、コロナ禍での式のため時間短縮の必要もあることもチャンスだろう」と言うのである。

また、一方では、違うリトルまさおが、「入学式とか卒業式の式辞は、奉書紙をめくりながら話した方がかっこがつくんじゃないの。何ももたないで話すと、かえっておかしくはないの」などと言ってくる。

いつものように、話す内容を考え、推敲に推敲を重ね、奉書紙に印刷し、準備は終わった。だが、それを見ながら話すかどうかについては葛藤が続いた。逡巡した。そして、入学式の前日、4月5日（月）に決断した。原稿である奉書紙を見ないことに決めた。

それでも、万が一のために、裏ポケットに入れておこうか。読まないまでも、台の上に出しておこうかなどと弱気になった。だが、決めた。原稿はもっていかない。自らを勝手に追い込むことにした。

一番こわいのは、途中で何を話すのかわからなくなり、頭が真っ白になることである。そうなる可能性はある。校長式辞は、今回で9回目となる。それでも、やったことがないことは、やはりこわい。それも失敗はできない厳かな式でのことである。

覚悟を決めて、4月6日（火）に臨んだ。結果は、意外にもスムーズにことが運んだ。ほぼ用意していた原稿の通りに話すことができた。マスクをしているため、途中で息切れして、かんでしまったのは、いつものことである。

とりあえず、やってみてよかったのだが、冷静に振り返ってみた。1年生や保護者、本校職員の反応を考えてみた。「あれっ、原稿はないのか」「さては、原稿を忘れたか」「いったい、どうした」などと思われたのではなかろうか。そんなことにばかり気がいき、私の話の内容が入ってこなかったのではないか。

一番こわいのは、本校職員から何の反応もないことだった。「校長先生、原稿なしなんですね」あるいは「校長先生、原稿忘れたんですか」でもいい。「今度の校長は変わっている。近づかない方が無難だ」とでも思ったのだろうか。もしかしたら、誰も気にしていなかったのだろうか。それはそれでさびしい。

とにかくにも入学式の校長式辞は無事に終わった。特別な達成感はなかったが、チャレンジしてみてよかった。何かが変わったような気がした。一段階上がったような気がした。その後も、ノ一原稿で話すことを続けている。だが、いまだにこわい。こわいから一応原稿はつくる。つくるから、それを思い出しながら話してしまう。すると、どうもいま一つなのである。

このあたりが、今後の課題だろうか。きっと原稿をつくったとしても、それにとらわれずに話すのがいいのかもしれない。試行錯誤しながらも、今年度はノ一原稿でやり抜きたい。そして、卒業式の校長式辞を迎えたい。